

次世代の歯科技工のあり方

鈴木 哲也

Perspective on Dental Technology for next generation

Tetsuya Suzuki, DDS, PhD

歯科補綴治療を支える歯科技工は今かつてないほどの大きな変革期にある。これまでの歯科医、歯科技工士の繊細な技能に頼ったアナログの歯科技工技術が、CAD/CAM に代表されるデジタル技術へと大幅に取って代わろうとしている。また、問題の多い安い中国製歯科技工物の輸入増加は、ある意味においては歯科技工のグローバル化を示している。さらに、ここ数年の口腔内スキャナーの進歩・普及は、印象採得の術式を根底から変え、インターネットに接続さえできれば、技工物製作の場所を選ばず、国の壁は無きに等しくなると考えられている。しかし、これでは世界に誇る日本の歯科技工士免許制度の崩壊に繋がり、結果として国民に安全・安心な医療を提供できるのかとの疑念もある。

歯科医が歯科技工をしなくなったと言われて久しいが、最近の歯科技工技術の進歩の早さから、歯学教育が技工現場のスピードについて行けていないのではないかとの声も聞く。それでは今後は誰が国民の歯科技工を担うのかと考えた時、現在の歯科技工士は約4割が50歳以上で、若い歯科技工士の極めて高い離職率を考えれば、このままでは近い将来日本には歯科技工士がいなくなるのではとの危機感がある。

以上のような変革期にある歯科技工に対し、最も関係の深い日本補綴歯科学会として、現状の把握と今後の展望を考えることは極めて重要と考え、「次世代の歯科技工のあり方」というテーマで今回4人の先生方に執筆を依頼した。

はじめに大阪歯科大学の末瀬一彦先生には全国歯科技工士教育協議会の会長という立場から日本および海

外の歯科技工士養成機関の現状、歯科技工士制度の違いを紹介いただいた。折しも本年6月に国会で「歯科技工士法の改正」法案が可決し、念願であった歯科技工士国家試験の全国統一化が決定したというホットな話題が提供された。さらに教育の大綱化、モデルコアカリキュラムの作成と今まさに進行中の事項が報告された。

木村健二先生には第一線で活躍されている歯科技工士という立場からご執筆をいただいた。経営される技工所にCAD/CAM技術をいち早く取り入れ、それによって歯科技工がどのように変わってきたのかを具体例をもとに紹介された。さらに米国の情勢などを参考に今後の展望を示された。「これまでに培ってきた匠の技とデンタルテクノロジーの知識を融合させ、柔軟に対応する姿勢を身につけること」という最後の一文に重みを感じた。

また、東京医科歯科大学の大木明子先生には日本で2校目の4年制歯科技工士教育機関として、将来を見据えて、これまでの2年制の教育にプラスしてどのような教育が必要なのかという観点から記載していただいた。キャリアアップのための新たな制度の創設などの提言がなされた。

最後に、広島大学の田地豪先生には我が国で最初に設置された4年制歯科技工士養成機関としての10年間の実績を紹介いただいた。中でもバイオデンタル教育という発想はユニークで、再生医療や食品科学などの分野へも歯科技工士の活躍の場が広がるという明るい未来も提示された。